

山名

源矩豊

第7号

会誌「山名」第7号 目次

平成27年度山名会歴史講演会より

室町文化の歴史的意義

松本公一

1

京 応仁の乱の前と後

山本義典

19

平成28年度山名会歴史講演会より

秀吉・家康期の山名禅高

伊藤真昭

32

平成29年度山名会歴史講演会より

山名宗全の虚像と実像

呉座勇一

52

「山名」第7号発行に際して

事務局

76

平成27年山名会歴史講演会第1講

室町文化の歴史的意義

池坊短期大学教授 松本公一教授

(山名会活動記録のビデオより起稿)

講師紹介 (山名年浩会長)

山名氏の特長の一つは・・・、鎌倉・室町・江戸と三つの幕府を通して存在し得たのは、武家の中で山名氏だけなんです。そう言う中で、山名氏が果たした歴史的な意義とは何なのか、という事をハッキリさせることが、非常に大事かと思えます。

今日の最初の講師である松本公一先生は、こちら池坊短期大学の教授でいられます。同志社大学の大学院で文化史学を研究され、ご専門は日本宗教文化史、伝統文化論で御座います。

歴史学者の方のお話は、非常に確かな史料・史実に基づいて、一体何が大事であったのかと言う点を掘り下げて頂けます。私も今回の件で数回、松本先生にお目に掛かりましたが、非常にキツチリとした方で学者として信用できるし、きつと授業も有意義な楽しい授業をなさっていると思います。それでは松本先生よろしくお願い致します。

はじめに

ただ今、過分な紹介をいただきまして、今紹介されたような形で一時間出来るかな、と、ちよつと不安になってきました。それで、私は今回は「室町文化の歴史的意義」という所でお話をさせていただきます。

先ほどご紹介いただいたように、私は同志社大学の文学部：文化史学と言う他には無い名前の歴史学を今でも勉強しています。

文化史学と聞きますと多くの人は「文化の歴史をやっているんですね」と言うような事を言われます。実はそうではなくて、人間が作り出した物、政治であり、経済であり、宗教であり、これらは広い意味で全て文化なんです。

人間が作り出した物を対象にしながら、時代時代にどのような特徴があったのか、どういう特徴を見出せるのか、と言うのを明らかにしていこうと言う

のが文化史学でございます。

今回、山名年浩会長様との打合せの時にこんな話なら出来るとお話させてもらいましたが、山名会の大会ですので、室町文化の中で山名氏はどういった事を果たしたのか、といったところをまずお話したいと思います。

それに引き続き、では山名氏が生きた室町時代の文化とはどういった物だったのか、ということが続けてお話をする流れにしたいと思えます。

パワーポイントも作ったのですが、私の場合、写真とか絵です。それ以外はレジュメと適宜、板書をさせていたただきたいと思えます。後ろの方は見にくいかも知れませんがご容赦下さい。まずレジュメの順番にお話をしていきたいと思えます。

一、山名氏の文事

第一番目に室町時代の「山名氏の文事」と言う書き方をしました。山名氏は文化的にはどういう活動をしていたのか、と言うことですね。

山名氏といえ、どうしても応仁の乱の時の山名持豊。まあ、この人が余りにも傑出して有名なわけですね。

ところが、山名氏というのは…皆さんにお話するのは釈迦に説法ですが、室町幕府において四職の一

家であった。四職と言うのは、侍所の長官を四つの大名家で順番にやっていく訳ですね。赤松・一色・山名・京極の四家です。当然、侍所の長官と言うことは、室町將軍と近い位置にいる訳です。

山名時照と詩歌

山名持豊以前に山名時照という人物がいます。室町文化の中で考える時、山名時照という人物は無視出来ない人物なんです。

今回の事で勉強させてもらい気付いたのですが『一休』という漫画の中に山名時照が出ているんですね。それでどういう立場で出ているかと言うと、將軍と共に幕政の合議を行う宿老の一人として描かれており。それは恐らく間違いはない。

山名時照という人は1367〜1435まで生きた人です。幕政にも活躍した人なのですが、後世のものになります。『山名氏系図』に次のような記述があります。

「時照作詩及び倭歌を好む。其の詩歌世に伝ふ。」

と『山名系図』の時照のところ明記されています。

『山名系図』自体が出来たのが、少し後の時代に

なるのですが、時熙と言う人物は詩歌、ここでいう詩歌というのは、詩は漢詩で、歌は和歌です。

漢詩や和歌を非常に好んで、その詩は世に伝わっていたという記述があります。

この記述は非常に重要で、実際に見ていきますと、この時熙さんという人は、特に和歌については、様々な実績を認めることが出来ます。

例えば、『新統古今和歌集』を見てみると「題しらず」として源時熙（山名時熙）の

「風さゆるこの夜やいたく更けぬらん

河音すみて千鳥鳴也」

（『新統古今和歌集』巻第六）

という和歌が入っています。

『新統古今和歌集』というのは、勅撰集、勅撰集というのは天皇が命令をして、編纂をさせた和歌集なのです。

勅撰集というのは、最初は平安時代の『古今和歌集』に始まります。実は室町時代までに、二十一集、勅撰和歌集は作られていて、この『新統古今和歌集』が最後を飾る物になるのですが、そこに一首入集しております。

実は武家としては、その他何人かは入集している

のですが、やはりそこに名を残すと言うことは重要なことかと思えます。

更に山名の家というのは、意外と和歌に堪能な人が何人かいたということが分かります。例えば、『新後拾遺和歌集』という室町時代の前半に出来た二十番目の和歌集です。

その中に山名氏清の和歌が一首

「あはざりしつらさをかこつことの葉に

いまだにぬるゝにみ枕哉」

（『新後拾遺和歌集』巻第十三）

という和歌が入集しています。この頃の勅撰集には武家の和歌も入集しています。

本来、和歌という物は公家の物、貴族の物だったんですね。少なくとも、平安時代の和歌集には武家の和歌は、あまりありません。

例えば、鎌倉時代になりますと、鎌倉三代将軍の源実朝は個人の歌集『金槐和歌集』を作ります。

また、鎌倉時代に勅撰集に入集するのは、宮將軍となる宗尊親王の時代を待たなければなりません。文永二年（一二六五）に完成した『続古今和歌集』には、宗尊親王の和歌が、編纂を命じた後嵯峨院よりも多く入集した和歌集で、この和歌集は、

中略

•
•
•

『山名 第7号』見本

平成27年山名会歴史講演会第2講

京 応仁の乱の前と後

Room to Grow 山本義典代表

(山名会活動記録のビデオより起稿)

講師紹介 (山名年浩会長)

先ほどの松本公一先生は室町時代に焦点をあてたお話でした。室町期に現代に通じる習慣やしきたり、伝統文化と言ったものの基礎が形成されと言う事。もう一つは、山名氏が文化的にどう関わったかという、他では触れることが出来ない事柄を、史実に基づいて紹介していただきました。

次の講師の山本義典代表は、先ほどのお話とは雰囲気がガラッと変わって、退屈をしないお話になるうかと思えます。

山本氏は京都の人でして、華道美生流の美生家、春月堂香峰として、禁裏不出の華道の流れを受け継いで居られます。

また山本氏は日本文化への造詣は深いものをお持ちですが、アメリカの州立ハワイ大学・音楽学部のご卒業でして、以降、音楽やバレエ・映像等の分野を中心に活動なさいました。また、カナダ・ブリテ

イッシュュコロンビア州リッチモンドの代表教育委員にも就任なさっています。

それでは山本先生よろしくお願い致します。

はじめに

後攻めの大変な事が起こりまして、松本先生のキツチリとした論理的な講演の後なのですが、私の場合は、どちらかと言うとフィードバックでお話をしていきたいと思えます。講演時間は一時間以内、スタッフからは原稿を書いたのだからアドリブではやるなどキツク言われて居ります。どういう形で話が進んでいくかは分かりませんが・・・お付き合いください。

今日の講演、私としては山名氏については門外漢で、そこには深く触れられない分、その代わり持つて帰って貰いたいものが二つあります。それは話として、言葉として余り知られて無いことかも知れません。まずは皆さんと一緒に絵を見ながら、想像し

ながら、共に歴史を考えて見たいと思います。



応仁の乱 略図

応仁の乱の出発点

そもそも応仁の乱とは何やったんや？山名会の皆さんは応仁の乱がどういった経緯で起こったかは大体分かかっておられると思います。先ほどの松本先生のお話とかなり重複した内容もあるかと思えます。先生のお話も思い出しながら、この地図上で私と共に歩いてみて下さい。

応仁の乱は文献によれば10〜13年続いたとか？皆さんはこの戦いはどんな戦いだと思えますか？

例えば宇治川の戦いなどは、軍勢が川を挟んで東西で向かい合い、誰に当たるかわからない状態で弓を45度の角度で打ち合って戦いが始まるのです。応仁の乱と言うのはこの地図をご覧ください。

山名・細川の屋敷は堀川通りを挟んで歩いて5分ぐらいの距離、この近い距離で戦うんです。細川勝元の弟を攻めて応仁の乱が始まるという一説、その前に、足利将軍が殺されます。畠山氏で家督争いが起こり、御霊神社で戦が始まったのを応仁の乱という方もあります。日本の歴史の枠の中で、応仁の乱とは何処に位置するものなのかは後ほど説明します。

山名邸から細川邸を攻め、天皇や公家、細川方は花の御所に入る。花の御所は1〜2丁角程の狭さ、御構(おんかまこ)という土塁を築き、砦として、山

名勢の攻撃に備えるわけなんです。

山名側・西軍は大宮五辻に軍を置き、そして御霊神社・相国寺・百々橋等の戦いが有ります。その戦いは大きなものでなく、あまり弓矢・刀を使わない戦いで、では、何をしたかというとは放火合戦でゲリラ戦なんです。

山名方・細川方は約三年間、丸太町通より上、上京と言われる地域で放火合戦・引火合戦を行う。これが(初期)三年間の応仁の乱です。

その後、大將らは日野富子の和解策で、ならば和解しようかとなるんですが、その下の家来たちは、どうしたかというとは、何や分からんけど自分らは未だおさまらん事があるので、領国に帰って戦いを続けます。これが10〜13年と言われる、応仁の乱の歴史のスパンです。応仁の乱の出発はこういつた距離感の中で有ったと言うことを認識しておいて下さい。

チョット散歩しましょう。

① 御霊神社。御霊神社の林、ここに陣を構えたという雰囲気

③ 相国寺。これは法堂といって応仁の乱後にできたお堂です。ここは法堂に向かって地面が高くなっています。これは総構えの跡なんです。

④ 相国寺の池。池を挟んで山名と細川が対峙した。

何故、相国寺が大事かというとは花の御所が目の前だからです。これは同志社の寒梅館でここに「花の御所」があつて、天皇や將軍や公家が居りました。ここを獲りたいんですが、日本の施政者というものはトップを絶対に殺さない。そういう考えがある。西洋では、ナポレオンが時の皇帝を倒して、自分が皇帝になるような事があるんですが、日本では、町衆が將軍や天皇を倒し、その地位に座るといふ、それがありません。

⑤ 宝鏡寺。日野富子が「代理戦争みたいなのを止めなさい。」と和解策を行った場所。

⑥ 花の御所の室町通側。道が少し歪んでいる。これが土塁跡のレベルです。要は道がたわんでいます。

⑦ 大宮五辻西陣、西軍が集まってここから出陣した。

⑧ 百々橋の戦い、この川幅くらいで戦っていました。

⑨ 細川勝元邸付近だろうという場所。

⑩ 山名宗全邸の跡。

⑪ 山名町、宗全が住んでいたであろう街並み。

⑫ 山名町から細川邸側を望む、堀川を隔てて。

中略
•
•
•

『山名 第7号』見本

平成28年山名会歴史講演会

秀吉・家康期の山名禅高

華頂短期大学 伊藤真昭教授

(山名会活動記録のビデオより起稿)

はじめに

ただ今ご紹介に預かりました華頂短期大学歴史学科の伊藤真昭です。本日は全国山名氏一族会の総会に当たりまして、ご盛會誠におめでとうございます。この全国山名氏一族会の講演にお招きいただき誠に光栄に思っております。

私自身はプロフィールにありますように、豊臣政権下の京都のお寺について研究してきた訳でございますけれど、今まで色々な史料を見ている中で「禅高」という名前はよく見てはいたのですが、今回テーマを与えていただきまして、一度じっくりと山名禅高さんについて調べてみる機会を与えていただき、ありがとうございます。

今回、色々調べてみたのですが、先ずは禅高について今までどういった研究があるのかといったところから話をさせていただきます。本日の会場受付でもおいてあります『山名豊国』という冊子がござ

います。この冊子は今から40年以上前の昭和48年3月に刊行されています。小坂博之さんという方が執筆されたのですが、非常によく調べられているご本で、今日の私の話というのは、このご本にどれだけのものを付け足せるかなという程度でございます。既にこの本の中で非常に詳細に禅高の生涯について書いていただいていますので、このご本をベースに話をさせていただくこととなります。小坂先生が執筆されていた頃にはまだ見られていない史料等を今の私たちは見ることが出来ますので、そういった史料を補足したり訂正したりしていきたいと思えますが、大筋の流れとしては、殆どこのご本の中に尽くされていると思います。

この『山名豊国』ですが、古本屋で買った時の値段が4500円でしたが、山名会では3000円で販売しています。1500円高く買ってしまったかもしれません。お買い得でございますので皆さんも今日宜ければお買い求めください。

さて、小坂先生のご本の中のはしがきにもこのように書かれています。「なお、山名氏が本領但馬を中心として、中世後期二百数十年余にわたり、周辺諸国に残した政治経済的、文化的、あるいは血縁的影響・意義は非常に大きい」次からが大事な所ですが、「しかし、その史料は殆ど煙滅・散逸し、室町期に成った『太平記』『明德記』『応仁記』などのいわゆる『戦記物』、その他史書、系図の類も必ずしも実体を伝えず、それらを基として著された近世の『史誌類』にいたっては、さらに良質な物とはいえず、これらを利用するためには、より良質の『当事者発券のいわゆる『古文書』、同時代人の日記いわゆる『古記録』類の一・二等史料―史料によって孝証しなす必要がある」と、このように書かれています。

私もこの姿勢に従って、江戸時代に作られた編纂史料は使わずに、同時代の人が書いた日記や古文書のなかに、どういったことが山名禅高について記されているのかというのを見ていきたいと思います。ですので、非常に断片的にならざるを得ません。小坂先生もいわれているように、山名氏に関する史料が非常に少なく、色んな所に散逸しています。それらを全て網羅するのは困難ですので、本日のお話の範囲でご容赦願いたいところです。

それでは本日の使用史料の確認ですが、文章レジ

ユメが裏表のコピーで2枚ございます。それから、史料レジユメが裏表で1枚ございます。全部で3枚の資料があるかご確認ください。文章レジユメに従って進めさせていただき、適宜史料の何番をご覧くださいと申し上げますので、どちらも合わせてご参照いただければと思います。それでは本題に入ります。

今、申し上げましたように山名禅高さんという方が、信長・秀吉・家康期におられました。生き残って山名家そのものを伝えられました。その方についての研究は小坂博之先生の『山名豊国』という本に生涯にわたって記述されており、色んな史料を駆使して記述されており、山名豊国研究については今でもこの本がベースになるかと思っています。

もう一つ先行研究としては東京大学史料編纂所や国学院大学で教鞭をとられた桑田忠親先生が、「お伽坊主山名禅高」(『大名と御伽衆』)という文章を書かれています。このご本は出家して「お伽坊主」になつてからの山名豊国の記述でございます。記録に出てくる色んなエピソードを散りばめて文章を書かれています。本日はそういった記録やエピソードは使用いたしません。

ここで問題点としては、先ほども申し上げたように豊国に関する同時代の史料が非常に少ないという

ことです。豊国自身が書いた手紙などは吉川家文書に収録され活字として見ることが出来るのですが、それ以外にはなかなか豊国さんが書いたものが見つけられません。そこで色んな人が豊国さんについて書いたものを今日は集めて来て、そこから、秀吉・家康期の山名禅高さんのイメージを作っていきたいと思います。

使用史料

今日は秀吉・家康期と時期を区切っています。ですから信長期や鳥取城にいた頃のことにはあまり触れません。主に京都にやって来てからの禅高さんがどのような活動をしていたのかについて一次史料を元にお話をさせていただきたいと思えます。

一次史料とはどのような史料かと申しますと、公家の山科言経（ときつね・1543～1611）の日記である『言経卿記』。相国寺の僧侶が書いた日記である『鹿苑日録』。あとは、『御湯殿の上日記』、これは御所に仕えている女官が天皇の状況を日々書き記した日記です。

そのほかに、『豊臣秀吉文書』。これは現在刊行中で豊臣秀吉が出した手紙を網羅した史料集で、全10巻の予定で現在まで第2巻目まで刊行されていますので、その範囲で禅高さんに関するものを拾いだ

しました。

あとは補助的に、編纂資料になるのですが、まず、ある程度信用がおけるものとして江戸幕府が各大名家に作らせて提出させた系図である『寛永諸家系図伝』と『寛政重修諸家譜』といった系譜類があります。また江戸時代中期、京都の名勝を案内したガイドブックである『都林泉名勝図会』と小瀬甫庵が江戸時代になって書いた秀吉の一代記である『太閤記』にも禅高さんの名が見えます。

そして下記のように、いくつか自分で設問を設定しました。

問① 禅高はいつ京都に来たのか。

問② 禅高はいつから秀吉に仕えたのか。

問③ 禅高はいつから家康に仕えたのか。

問④ 家康との主従関係ができたのはいつか。

問⑤ 文化人としての交友関係はどのようなものか。

問①から問⑤まで、自分なりに山名豊国さんについて史料からうかがってみたいと思えます。

問① 禅高はいつ京都に来たか。

まず一つ目、山名禅高はいつ京都に来たかについてですが、鳥取城を豊臣秀吉が攻めて、山名豊国が降伏するわけですけれども、その後、彼はどのような

中略

•
•
•

『山名 第7号』見本

平成29年山名会歴史講演会

山名宗全の虚像と実像

国際日本文化研究センター 呉座勇一先生

(山名会活動記録のビデオより起稿)

ただ今ご紹介に預かりました呉座です。この度は山名会講演会でお話しさせていただくということで、大変に光栄に思っております。本日は「山名宗全の虚像と実像」という演題で応仁の乱と山名宗全の関りについてお話したいと思えます。

山名宗全のイメージ

さて、山名一族と言いますと、一般的に一番有名なのは山名宗全だと思います。山名宗全というのは皆様ご存じのように、応仁の乱。応仁の乱は東軍と西軍に分かれて戦ったのですが、東軍の総大将が細川勝元、西軍の総大将が山名宗全ということになります。宗全は本日の会場があるこの西陣辺りに陣を構えて戦ったということになります。

そんな山名宗全ですが、実は宗全が活躍していた室町時代やその後の戦国時代のもので宗全を描いた肖像画というのには残っておらず、江戸時代以降の物しか残っていません。

では、実際にどんな物が残っているかと言いますと、これは『山名宗全細川勝元確執之図』(図1)という錦絵で、そこに山名宗全が描かれています。鳥取市の歴史博物館が持っている応仁の乱に関する錦絵です。実は私、(平成29年)11月に鳥取で講演したのですが、その時に鳥取市歴史博物館の方とお話ししたのですが、最近この絵の問い合わせが非常に増えていて、写真を使わせてもらえないかという



図1 山名宗全細川勝元確執之図
(鳥取市歴史博物館蔵)



図2 『本朝百人武将伝』
(国立国会図書館蔵)

問い合わせが沢山有つて、急に有名になつたということだす。

もう一つは、これも江戸時代のもですが、国立国会図書館が持つている『本朝百人武将伝』(図2)といつて、つまり日本の有名な武将を百人集めて、その人たちの紹介や説明をしている本ですが、その日本を代表する有名な武将百人の中の一人として、山名宗全が選ばれていて、宗全の絵が描かれていません。

しかし、何れの絵も江戸時代に描かれたもので、山名宗全その人本人を見て描いたものではないので、当然、想像で描いているのですが、江戸時代の人から見ても山名宗全という人は非常に強面な、ちよつと悪い感じの人というイメージであつたことが分かるかと思ひます。

『塵塚物語』の逸話 「山名宗全、或る大臣と問答の事」

そのほかに、宗全の人物像を物語るエピソードとして有名なのは、お手元の資料の最初のページに載せましたが、『塵塚物語』という史料に書かれたものです。戦国時代の天文21年(1552)に作られた本なので、これも応仁の乱の勃発から90年近く経つてから書かれた本ですが、全6巻65話の一番最後に山名宗全に関するエピソードが載つています。

それは、「山名宗全、或大臣と問答の事」というエピソードですが、

「山名金吾入道宗全、いにし大乱の比をひ、或大臣家にまいりて、当代乱世にて、諸人これにくるしむなど、さまざまものがたりして侍りける折ふし、亭の大臣ふるき例をひき給ひて、さまざまかしこく申されけるに、宗全たけくいさめる者なれば、臆したる気色もなく申侍るは、『君のおほせ事、一往はきこへ侍れど、あながちそれに乗じて例をひからせらるる事しかるべからず。凡そ例といふ文字をば、向後は時といふ文字にかへて御心えあるべし。それ一切の事はむかしの例にまかせて何々を張行あるといふ事、此宗全も少々はしる所也：(中略)凡そ例と云は其時が例也。大法不易、政道は例を引て宜しかるべし。其外の事、いささかにも例をひかるる事心えず、一概に例になづみて、時を知らざるゆへに、あるひは衰微して門家とほしく、あるひは官位のみ競望して其知節をいはず、此くの如くして終に武家に恥かしめられて、天下うばはれ媚をなす。若しみて古来の例の文字を今沙汰せば、宗全ごときの匹夫、君に對して此く

の如く同輩の談をのべ侍らんや、是はそも古
来いづれの代の例ぞや、是則時なるべし：（中
略）いまよりのちはゆめゆめ以てこころなき
ゑびすにむかひて、我方の例をのたまふべか
らず。もし時をしり給はば、身不肖なりと云
ども宗全がはたらきを以て尊主君公みな扶持
したてまつるべし』と苦々しく申ければ、彼
大臣も閉口ありて、はじめ興ありつる物がた
りも、皆いたづらに成けるとぞ、つたえきゝ
侍し、是か非か」

『塵塚物語』

《大意》

山名宗全は応仁の乱の頃にある大臣の邸に行
つて、昨今世が乱れている事について語つた
事が有つて、大臣の方は「昔はこんな事が有
つた。」「あんな事が有つた」「昔の例によれば
こうだった」と色々と賢く語つたが、それに
対して宗全は、まあ、あなたの言っているこ
とも分かる。しかし、たしかに一理あるのだ
けれども、昔はこうだったというのは良くない。
これからは昔の「例」ではという言葉に
代えて、「時」という言葉を使いなさい。「例」
と言つてもそれは其の時の例で、昔の例が今
の世の中にそのまま通用するという事では無

い。あくまで其の時の例であつて、時代が変
わつて社会が変わつたら、そんな物は意味が
無くなるのだ。だから例にばかり拘るべきで
は無い。あなたたち、即ち公家貴族たちはそ
う言つた時代の変化というものをきちんと認
識せず例にばかりとらわれていたから、武
士に天下を取られてしまつたのでしよう。そ
もそも私（山名宗全）のような身分賤しき武
士が、大臣と対等に語り合うということが昔
は有りましたか。そんな例は無いでしょう。
これこそが時というものです。もう例に拘る
のは、やめるべきです。あなたが現実を見て、

今現在の世の中の流れに適応しようとするな
ら、わたくし宗全があなたをお助けしましよ
う。と言つて、完全に大臣の方がやり込めら
れてしまい、大臣は黙りこくつてしまつた。

これは有名な逸話でご存じの方も多のですが、こ
こで描かれている宗全は、昔の例やしきたり、秩序
やルール等はどうでもよく、今現在の時代に適応す
ることが大事であり、旧来のしきたりに縛られない
変革者のイメージが強く出ています。

勿論、これは宗全が死んでから何十年も経つてか
ら出来た本に書いてある話なので、これが本当の話
かどうかは分からないのですが、少なくともこの本

中略

•
•
•

『山名 第7号』見本

「山名」7号の発行に関して

山名会では平成27年・28年・29年と3年にわたり総会行事の中で、一般公開の歴史講演会を行って参りました。この歴史講演会の開催を通じて多くの方々に「山名氏の歴史」や「山名会の存在」に興味を持つて貰えることを期待しての講演会開催でした。(左表参照)

各歴史講演会での講演一覧。			
H 27	室町文化の歴史的意義	松本公一先生	
	京 応仁の乱の前と後	山本義典先生	
H 28	於・池坊短大	参加者120名	
	秀吉・家康期の山名禅高	伊藤真昭先生	
H 29	於・華頂短大	参加者80名	
	山名宗全の虚像と実像	呉座勇一先生	
	於・西陣織会館	参加者108名	

今回発行の山名7号では、平成27年と29年の歴史講演会での講演を掲載致しました。

各歴史講演会では、講演会場になじみ深い先生や時節の話題に通じた講師方をお招きして、多くの方々と共に聴講していただけるように準備致しました。振り返って見ますと、各講演会共に80と120名の参加者を得ることが出来、この歴史講

演会への参加を切欠に山名会への入会をなされた会員さんも幾人か居られます。山名会の存在周知と会員確保の点から見ると得るところの多い歴史講演会であったかと思えます。

何れの講演も興味深い内容のものばかりで、これらが小冊子とはいえ一冊の本に集約できることは山名会員にとつては貴重な参考書になるかと思えます。

また、日本中世史に興味を持たれている方々にも、面白く読んでいただける一冊かと思えます。まずは気軽に頁をめくって下さい。

平成27年と30年の山名会総会の概要 報告

平成27年度

平成27年の総会・歴史講演会は京都市・池坊短大「心ホール」を会場として、『京の歴史と山名氏』というテーマで実施しました。

講演会では、松本教授(文化史学専門)に、「室町文化の歴史的意義」を、山本代表(企画事務所主宰)には「京 応仁の乱の前と後」をご講演いただきました。各講師独自の視点から山名氏が六分一殿と呼ばれていた頃の「室町時代の文化」や「京の町の変遷」について語っていただき、そこに山名氏がどの

ように関わっていたか、お教えいただきました。

講演会の最後は、西陣ゆかりの千本六斎会による六斎念仏をアトラクションとして披露頂きました。大神楽のようなスリリングな演技に思わず手に汗を握りながら拝見しました。

一般の方々も対象にした歴史講演会でしたので、広報ポスターを作成して、会員の関係各所に掲示願ったり、京都の地元紙でも講演会の紹介記事を書いて貰うなど広報に励んだお陰で、120名もの参加をいただき賑やかに実施することが出来ました。

平成28年度

平成28年の歴史講演会は会場を浄土宗の本山・知恩院門前の華頂大学「華頂ホール」を会場として、テーマを『京の地と山名氏』として実施しました。

今回も講演は2題お願いし、華頂短大の伊藤教



池坊短大「心ホール」で実施

授には「秀吉・家康期の山名禅高」と言うご講演と、もう一題はガラツと雰囲気を変えて、日本南画院会長の町田先生に「南画の楽しみ方」をお話いただきました。

今回も地元紙での紹介記事やポスターを作って文化歴史関係の史料館などでの掲示をお願いして、80名程の参加をいただきました。

平成29年度

平成29年は西暦では2017年で応仁の乱が勃発した応仁元年（1467）からは550年の節目にあたり、雑誌や、テレビ番組では度々「応仁の乱」が取り上げられる等チョットした「応仁の乱ブーム」が起きていたようです。

山名会歴史講演会では、応仁の乱から550年のこの年に新書『応仁の乱』を著され、応仁の乱ブームを後押しされた呉座勇一先生に、講演を引き受けていただきました。

講演会の会場は、山名宗全邸跡から程近い所に建つ西陣織会館。正に京都西陣の中心地で、応仁の乱



会場となった「華頂大学」

について、山名についてお話し頂きました。

今回も各方面からのご協力に加えて呉座先生のネームバリューも有って108名と、大人数で行うことが叶いました。

平成30年度

平成30年の山名会総会では、歴史講演会中心の形式は一旦お休みとして、久々に史跡探訪を主とした旧来の形で11月10日〜11日の日程で行いました。1日目は山名氏発祥の地である群馬県高崎市で山名八幡宮はじめ山名氏関連の史跡や神社。2日目は山名氏の本家筋である新田氏や、太祖・義範公の兄弟筋にあたる得川（徳川）氏の史跡等を巡って参りました。

今後も総会での史跡散策や歴史講演会の開催を続けて参りたいと思います。会員以外の皆さんでも、山名会の催しにご興味が御座いましたら、気軽にご参加下さい。



会場の「西陣織会館」

編集後記

山名第7号の発行ですが、もう少し先に、先に・・・と先送りしている間に第6号から5年もの間隔が空いてしまいました。その間に平成から令和へと時代も移り変わってしまいました。

7号には平成の時代に開催しました歴史講演会の講演録を4本掲載しています。何れの講演も興味深い内容ばかりですので、じっくりと読んでいただければと思います。

お陰さまで会員登録数は60名を越えましたが、令和の新時代でも山名会として活動できますよう、新たな活動提案等、何か良いアイデアが有りましたら、ご意見いただけますようお願いいたします。

会誌 「山名」第七号

令和2年5月1日発行

編集・発行 全国山名氏一族会

兵庫県美方郡香美町村岡区

村岡2365 山名氏史料館内

(事務局 吉川廣隆)

印刷 岩見印刷(株)

兵庫県豊岡市日高町土居67-1

